



学年団の指導改革

学年全体で個々の生徒に寄り添い、 目標意識や学力の向上を支える

宮城県・私立仙台城南高校

1分
で分かる軌跡

少子化の影響で生徒募集という課題に直面していた宮城県・私立仙台城南高校は、2020年度入学の学年において、将来に向き合い、夢や目標に挑戦する生徒を育成するための教育改革に着手。その成果を測る指標の1つに国公立大学合格者数を挙げ、学年団でビジョンを共有し、学習・進路指導の強化を図った。各教師が足並みをそろえて生徒とこまめに面談し、一人ひとりに寄り添う指導によって、生徒の目標意識や学力を向上させ、確かな成果を引き寄せた。

#学年団のチームビルディング
#個別指導の強化

学校概要

設立 1961（昭和36）年
形態 全日制／普通科、科学技術科（*1）
／共学

生徒数 1学年約320人
2022年度卒業生進路実績

国公立大は、帯広畜産大、北海道教育大、北海道大、室蘭工業大、岩手大、東北大、福島大、茨城大、埼玉大、大阪などに18人が合格。私立大は、東北医科薬科大、東北学院大、東北工業大、東北福祉大、芝浦工業大、東京電機大、法政大、明治大などに延べ168人が合格。

*1 2021年度入学生までは、特進科、探究科、科学技術科の3学科、2022年度入学生からは、普通科（特別進学スーパーコース、特別進学アクティブコース、総合進学コース）、科学技術科（電子機械コース、情報通信コース、デザインコース、電気エネルギーコース）。



千葉俊哉
ちば・としや
普通科総合進学コース長
同校に赴任して19年目。理
科（物理）。



鈴木理恵
すずき・りえ
グローバル教育推進部長
同校に赴任して20年目。英
語科。



相澤茂紀
あいざわ・しげのり
1学年主任
同校に赴任して15年目。英
語科。



中野智保
なかの・ちほ
入試広報部
同校に赴任して15年目。理科
（生物）。



濱谷 輔
はまや・たすく
進路指導部進学主任
同校に赴任して10年目。数
学科。



菊地 亨
きくち・こう
進路指導部長
同校に赴任して23年目。数
学科。



鈴木 聡
すずき・さとし
前3学年主任
同校に赴任して18年目。進
路指導部。工業科。

変革の背景

**生徒の成長を支えるため、
学年全体で指導する体制に**

東北工業大学と同じ法人が運営する宮城県・私立仙台城南高校は、前身が男子校だったが、共学化を経て、2013年度に、特進科、探究科、科学技術科（*1）を擁して、現在の校名とした。近年は、少子化の影響で、同校が立地する仙台圏も生徒募集の激戦区となり、入学者の確保と学力層の多様化という課題に直面していた。普通科総合進学コース長の千葉俊哉先生は、こう振り返る。

「将来の目標が漠然としたまま3年生になり、受験勉強に身が入らない生徒も少なくありませんでした。大学入学をスタートと捉え、人生を充実させていける生徒を育てるため、早い時期から自分の将来に向き合わせ、やりたいことに挑戦できる学力をつけさせる必要があります」
20年度には学習と部活動にバランスよく取り組む「アクティブコース」を特進科に新設。同校は学科やコー

スごとに教育課程が異なるため、学年全体で指導の共有はあまりされていなかったが、コース新設を機に、学年全体で指導する体制に改めた。

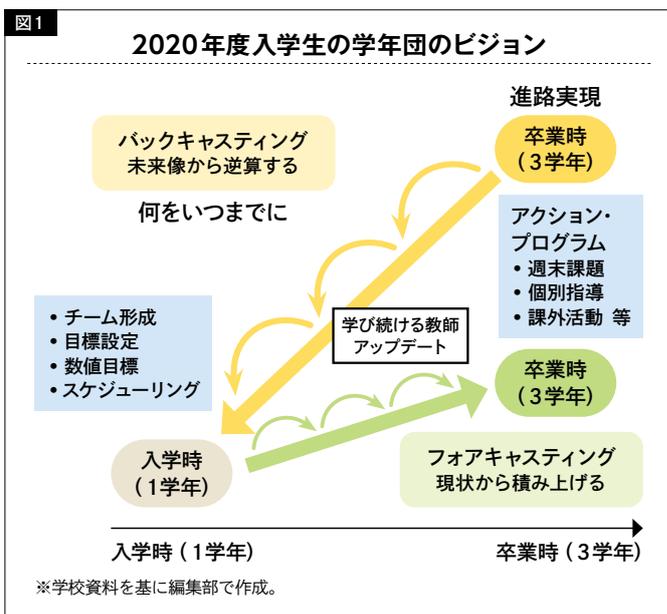
変革の一手①

**学年団でビジョンを共有し、
チームビルディングを図る**

20年度の1学年団がまず行ったのが、学年団の団結力の強化だ。学年主任を務めた鈴木聡先生は、次のように語る。

「先生方にかけていることを出しても良かったところ、生徒の学力が多様化したことで、コース内での一斉指導が難しくなっていると分かりました。そうした中でも、生徒の進路の選択肢を広げるためには、学力向上こそが最も重要だと、学

年団で改めて確認しました。そして、社会が変化する中で、教師自身も学び続けることが必須だと、共通認識を図りました」
次に指導のビジョンを作成。バックキャストイングの考え方の下、卒業時の生徒の姿から逆算して指導のストーリーをつくり、フォアキャストイングの考え方の下、生徒の現状を捉えた上で週末課題や個別指導などを行う計画を立てた（図1）。



お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

図2

週末課題の流れ

		月	火	水	木	金	土	日	
教科	国語	配信担当者 間違えた問題 等のフォロー アップ課題を 配信	学年指導 未提出の生徒に放課後、 課題に取り組みさせる			配信担当者 放課後に配 信	生徒は配信され た課題に家庭で 取り組む		
	数学		→				→		
	英語		→				→		
クラス 担任 副担任	朝のSHR等 で提出状況を 確認	毎朝提出状況を確認し、未提出者に声をかけ る。提出状況が悪ければ、教科担当者と 協力して個別指導を行う							
教科 担当者		提出状況を確認し、記録する。提出状況が悪 ければ、クラス担任と協力して個別指導を行う							

※学校資料を基に編集部で作成。

週末課題で
家庭学習の習慣が定着

学習指導では、週末課題を1年次から学年全体で実施した。具体的には、国語・数学・英語の課題を毎週木曜日にオンラインで配信。担任が月曜日に提出状況を確認し、未提出

者に声をかけた。火曜日と水曜日は放課後に未提出者を集めて、課題に取り組みさせた(図2)。前3学年探究科担任の相澤茂紀先生は、1年次の1学期が肝心だったと語る。

「1年次の1学期は未提出者が多く、提出するまで生徒個々に何度も声をかけ、それでも未提出の場合は放課後に必ず取り組みませました。すると、生徒の中に『課題は必ず提出するもの』という意識が定着し、2学期には、ほぼ全員が提出日を守るようになりました」

週末課題は、家庭学習習慣の定着にもつながったと、鈴木聡先生は言う。

「家庭学習は、机に座って勉強を始めるまでに心理的なハードルがありますが、いったん週末課題に取り組み始めると、『ほかの勉強もしよう』という気持ちになりやすいようです。家庭学習習慣の定着は、学力の着実な向上につながりました」

課題の内容は、例えば1年次の国語は、前週の授業

の確認テストと、生徒が受検する検定で問われる語彙の問題演習、数学は、前週の授業の確認テストと、解けなかった問題の解説動画の視聴、英語は、中学校の学習内容を含む基礎事項の復習とした。特に、動画の視聴量(インプット)よりも、演習量(アウトプット)を重視した。

変革の一手②

小さな成功体験を通じて、
学習意欲や進路意識を高める

3年間を通して、個人面談や個別指導にも学年全体で力を入れた。前3学年特進科アクティブコース担任の中野智保先生は、担任がこまめに面談を行って、生徒一人ひとりの状況や課題を把握し、卒業後の進路を見据えた指導・助言を行ったと語る。

「目の前のことしか見えていない生徒たちに、3年後に向けて学習や経験を一つひとつ積み上げていくよう助言しました。本校への入学が不本意で、『どうせ自分にはできない』といった発言をする生徒には、『まずはやってみようよ』と後押しする

など、小さな成功体験を積みせることを大切にしました。すると、徐々に学習や活動に前向きに取り組むようになりました」

東北工業大学との高連携プログラム「アカデミックインターシップ」も、学年全体で推進した。希望者が同大学の研究室に参加する同プログラムは、11年度から実施している。以前の参加者は主に探究科の生徒だったが、他学科にも声をかけたところ、例年30人程度だった参加者数が、20年度には約80人に増加。コロナ禍だったが、高校と大学が連携し、安全に十分配慮した上で実施した。

同プログラムを通じて学びたいことを見つけ、希望進路が具体的になった生徒が、他の生徒に好影響をもたらす姿も見られたと、前3学年探究科担任の濱合輔先生は語る。

「同プログラムに参加した生徒が、他の生徒に『大学の研究内容がとても面白かった』『志望理由書や面接にも役立つそう』などと話す姿を何度も目にしました。21年度にはさらに参加者が増え、多くの生徒が進路意識を高めました」

管理職を含めた全教師で 面接や小論文を個別指導

22年度の3年次は、それまで担任が担っていた総合型・学校推薦型選抜に向けた面接や小論文の指導を、管理職を含めた全教師がそれぞれ生徒5人程度を受け持つ体制とした。そのねらいは、特定の教師に負担が偏らないようにするとともに、教師全体の指導力の向上にもあつたと、進路指導部長の菊地亨先生は語る。

「職員室で様々な教師が指導する姿を見る機会が増え、『こうやって生徒の考えを引き出すのか』などと、教師間で指導法を学び合いました。ほかにも、個人情報削除した上で、志望理由書などをオンライン上で閲覧できるようにしたり、志望理由書や小論文の指導法をテーマにした校内研修を実施したりして、教師間で指導のノウハウを共有しました」
それらの取り組みは、生徒を含めた学年全体のチームとしての意識の高まりにもつながった。例えば、総合型・学校推薦型選抜で合格した生徒が、他の生徒に面接のアドバイス

をしたり、グループディスカッションやプレゼンテーションの練習に参加したりして、自分の経験を積極的に還元しようとしていたという。

変革の成果と展望

合格者数増加とWWL指定で 改革の機運が高まる

改革の成果は22年度3年生の合格実績に表れた。国公立大学合格者数は過去最高の18人を記録。入学時のGTZ（*2）がCゾーンの生徒が力をつけて合格したケースが多かった。一般選抜で難関国立大学に合格した生徒は、入学時はBゾーンだった。また、東北工業大学への内部推薦の基準を満たす生徒が大幅に増えた。それらの成果は教師の自信にもなり、改革の機運が高まっている。23年度、文部科学省の「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援」の指定を受け、イノベティブなグローバル人材の育成に向けて動き出した。グローバル教育推進部長の鈴木理恵先生は、次

のように展望を語る。

「22年度は、SDGsを踏まえた、教科横断的な学びに注力しました。例えば、バナナの茎で作るバナナペーパーを題材とした英語の単元に関連させて、生物の授業でバナナペーパーを作り、クリスマスカードにして保護者に贈る活動を行いました。公民の授業ではバナナペーパーがどのように社会に貢献できるのかを考えました。23年度以降も、そう

した教科横断的な学びを充実させて社会貢献活動を行い、その内容を国内外に発信していく予定です」

20年度からの3年間の改革と成果をきっかけに、同校の教師にはチームとして動く意識が根つき、職員室は情報交換で活気を帯びている。教師が、そして学校が変わり続けようとする姿勢は生徒にも伝わり、教師の期待を上回るような成長や飛躍につながっていくことだろう。

ベネッセが見た軌跡

生徒一人ひとりへの 細かな個別指導が魅力！

私が同校を訪問する中で印象に残っているのは、面談です。先生方は、生徒によって異なる探究テーマを踏まえて、各テーマを追究できる進学先を提示されます。先生方の知識が豊富で、面談を経て、実際に行動を起こす生徒も増えています。近年の地元志向・安全志向の中で、「やりたいことに取り組むために、西日本の大学に進学したい」「目標の実現に向けて、後期日程まで粘る」といった生徒が出てきています。

先生方は、私にも、温かくも本気で対話をしてくれます。まさに面談を受けているかのような気持ちになり、いろいろなことを相談しています。先生方の教育への想いと生徒に対する丁寧さが実り、東北地区初のWWL指定につながったのだと思います。

全体指導と個別指導にあられる先生方の後方支援ができるように、これからもよい情報を集めてお届けして参ります。

(株)ベネッセコーポレーション 東北支社
仙台南高校担当 志茂陽平



* 2 ベネッセのアセスメントにおける共通の学力評価指標、「学習到達ゾーン」のこと。「S1」～「D3」までの15段階で評価される。実力診断テストでは、そのうち「A1」～「D3」で評価される。